

# G. H. Mead の自我論と「神経社会学」

東京通信大学設立準備室 櫛原克哉

## 1. 目的

20世紀後半以降、脳イメージング技術の発展、認知脳科学や進化人類学における「社会脳」への関心の高まり、心の哲学における「消去的唯物論」の展開などに呼応するかたちで、社会学においても脳を考察対象として捉える動きが活発化した。その最たる例として、Franks と Smith (1999) の「神経社会学 (neurosociology)」の試みがあったが、感情や自己の社会構築の過程を重視する社会学の土壌ではほとんど受け入れられなかった。その後の 2013 年には Franks と Turner (2013) による『神経社会学ハンドブック』が刊行され、最新の神経科学の知見と社会学理論の接続が試みられているが、そのなかでは特に G. H. Mead の自我論が注目を集めている。

本報告では、Mead の自我論における「脳 (中枢神経系)」の位置づけを検討した後に、「神経社会学」において Mead 理論が論じられるさいの傾向性についてみていく。この作業を通じて、神経社会学の枠組みでは十分に扱われてこなかった、自己と脳の関係性をめぐる Mead の問題関心を明らかにしつつ、今後の研究の展望について試論的に述べることにしたい。

## 2. 方法

上記の目的を達成するため、本報告では Mead の自我論と、1990 年代以降 D. D. Franks を中心に展開されてきた神経社会学を比較対照するかたちで検討する。

## 3. 結果

Mead (1934=1995) は『精神・自我・社会』の冒頭部で、生理学的機構を捨象した当時の行動主義的心理学を批判していることにも示されているように、自我論のなかで「生理学的有機体」を考察する必要性を認めている。一方で Mead は、実際に自我論を展開するなかでは考察対象を「生理学的有機体なしの自我」に限定しており、その背景要因の一つには、当時の科学技術の発展段階に鑑みた理論的説明の「限界」がある。この「限界」を神経科学的な知見でもって補填することこそ、Mead 理論を扱う神経社会学の主要な目的であったといえる。一方で De Vos (2014) の用語法に倣えば、この試みには「強い神経科学」と「弱い社会学」の関係性があり、神経科学の知見が社会学理論を追加的に正当化したとしても、その理論的・実践的なインプリケーション (端的に言えば社会学理論の新規性) が把握しにくいという問題が残る。ここで再び Mead の前掲書に戻ると、Mead は「人が、中枢神経系によって個人の過程を言明できるようになればなるほど、人は行為を解釈するために、中枢神経系のなかに見いだされる型をますます多く使用するようになるだろう」と予示的に述べている箇所がみられる。ここから、「生理学的有機体」の器質的なメカニズムの解明という研究課題にくわえて、I と me のシンボルを介したコミュニケーションにおける「神経科学的なシンボル」がもたらす影響といった論点を導出できる。さらに、自我の「構成要素的自我」への崩壊といった Mead の問題関心からみた場合には、神経科学的なものとして認識され対象化・他者化される me が、自我の存立に及ぼす影響といった問題も導出される。したがって、神経社会学においても、神経科学に立脚した社会学的知見の産出にくわえて、神経科学的なシンボルの普及とそれがもたらす自我への影響——Giddens の「二重の解釈学」がいうように、社会学も「社会学的な神経科学知」を産出しうる——といった論点も包摂されることが望ましいと考えられる。そのため本報告では、Mead の自我論における I と me を媒介する神経科学的なシンボルと、それが自我に対して及ぼす影響という理論的パースペクティブを、神経社会学の文脈においても再評価したい。

### 【文献】

- Franks, D. D. and T. S. Smith. (eds), 1999, *Mind, Brain, and Society: Toward a Neurosociology of Emotion*, JAI Press.
- Frank, D. D. and J. H. Turner (eds), 2013, *Handbook of Neurosociology*, Springer.
- De Vos, J., 2014, “Deneurologizing Education? From Psychologisation to Neurologisation and Back,” *Studies in Philosophy and Education*, 34: 279-295.